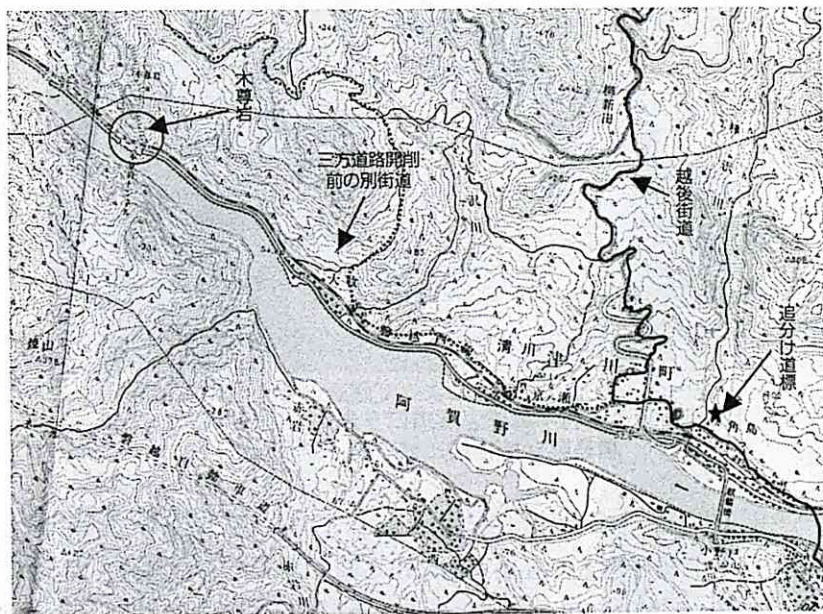


越後街道探索 (その4・諏訪峠 編)

川島隆義 1)・鈴木幸治 2)・栢森宇一郎 3)・寫田博之 4) *

我々がたどったこれまでの旧越後街道は、ほぼ国道49号線に沿っていた。今回の探索は、津川から新発田まで国道49号線を離れて諏訪峠を越え北へ行くことになる。

現在の国道49号線は津川から三河まで、峻険な阿賀野川峡谷の右岸をJR磐越西線と併走している。この峡谷沿いの国道は明治になって新しく開削されたものである。我々の探索は旧街道が目的であるが、諏訪峠に進む前にこの国道について、その成り立ちと経緯についても興味を持たれた。



図一 越後街道津川口の変遷 (国土地理院 1/25,000に加筆)

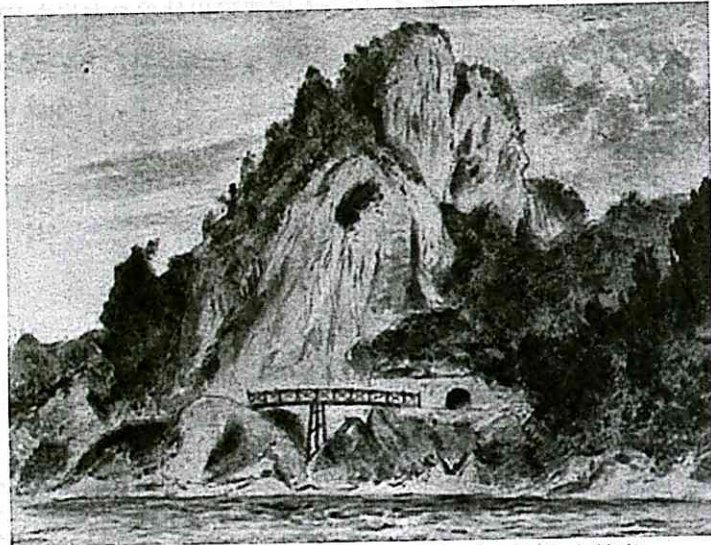
1) 三方道路の開削

津川から阿賀野川沿いの国道49号線は現在の地図でも「会津街道」とか「越後街道」と記されている。このうち津川～揚川間は明治15年6月から17年10月まで2年を費やして、当時の福島県令である三島通庸^{みちつね}₁₎が三方道路として強行に施工した。強行とは穏やかでない。このことは後に問題となったのだが、三島の命により地元民が狩り出され、阿賀野川の峻険な河岸を開削して造ったものである。

三方道路とは、会津若松から南の田島・今市方面(白川街道)と、西の津川・新潟方面(越後街道)、および北の米沢方面(米沢街道)への三方へ向かう道路の総称である。明治維新が終わって三島県令が着任すると、直ちに三方道路の開削を指示した。会津六郡²⁾の郡長を招集し、会津六郡連合会を作らせた。六郡に居住する16歳以上65歳までの男女は貧富にかかわらず、2年間毎月1日は労役に服さなければならないとし、しかも、無償であって役務に出ない者は1日の代夫賃として、男は15銭、女は10銭を出させた。代夫賃未

* 1) 街道探索隊 2) 新潟大学災害復興科学センター 3) (株)旭調査設計 4) (株)三菱マテリアル

納者には財産を差し押さえ、公売処分にするという厳しいものであった。当時、河野広中³⁾を中心とする「自由民権運動」⁴⁾が盛んに盛り上がっていたこともあって、この過酷な労働と厳しい代夫賃の取り立てが、喜多方事件⁵⁾や、福島事件⁶⁾へと発展した。このようにして三方道路⁷⁾の工事は強引に進められた。これらの事件は福島で起こった自由民権運動の発端になったと云えられている。



図一2 三方道路開削によって隧道が穿たれた本尊岩
「東蒲原郡清川村字本尊岩隧道口赤川水上ヨリ望ムノ図」
(福島県立博物館ビデオライブラリー)

東蒲原郡の主要な街道である会津（越後）街道は、諏訪峠を越える狭く、険しい山道であった。本尊岩⁷⁾の北側を越えて五泉方面に出る道もあったが（図一1参照）、諏訪峠越えよりさらに険しく、あまり利用されていなかった。三方道路の開削によって郡内（東蒲原郡）の変化は野村を通過しなくなり、天満と花立集落を直接結んだこと、本尊岩にトンネルが開通し、従来の曲がりくねった道路がほぼ直線になり、郡内で自動車が用いられるようになったのはこの時期からという。

新潟における三方道路は、国道49号線の基になった道路である。現在、本尊岩を過ぎて小花地向い付近はJR磐越西線により寸断されたり、国道49号線に拡張されたりしているが、一部三方道路の痕跡を残している箇所も見られる。

図一2は三方道路開削によって本尊岩に隧道が穿たれた時のスケッチである。写真と共に画家に描かせた、いわば工事写真に代わるものである。図の説明にある「赤川」とあるのは画家が東京の人で阿賀川を赤川と聞き間違えたものであろう。図の本尊岩は左に黒く尖った所であるが、平成8年以降の落石防止工事で切り取られ現在は残されていない。

当時の写真は高価であり、画家に画を描かせた方が安上がりだったためだろうか、越後街道の主要な箇所毎に記録画が残されている。

2) 角島^{かどしま}の追分け道標

津川駅の下流、角島集落西詰めにあるJR磐越西線のガードをくぐるとすぐに水田の中に小高い丘と杉の木立が目に入る。この丘は周囲30m程で、幾つかの石碑が置かれている。ここには馬頭観音や湯殿山の石塔、地蔵尊と共に、かつての越後街道の道標がある。この石碑群はもともと周辺に散在していたものであるが、耕地整理や道路改良でこの場所に集められ保存されている。

津川町教育委員会が建てた案内板には次のように書かれている。

角島の追分け道標

この追分け道標には「右新奈田、村上通」と刻まれ、諏訪峠を越え新奈田を経て越後へ通じる旧会津街道を示しています。また、「左水原、五泉、小川通」とあるのは阿賀野川に沿って大牧に出、カラベラ山の麓を通り^{けんそ}陰阻な本尊岩の上を越え、水原、五泉へ通じる街道を示しています。

この道標は、小川通が天保年間（一八三〇）に開削されたという記録から、その頃に建てられたものです。旧会津街道の証しとなるもので大切にしたいものです。

平成十年五月
津川町教育委員会

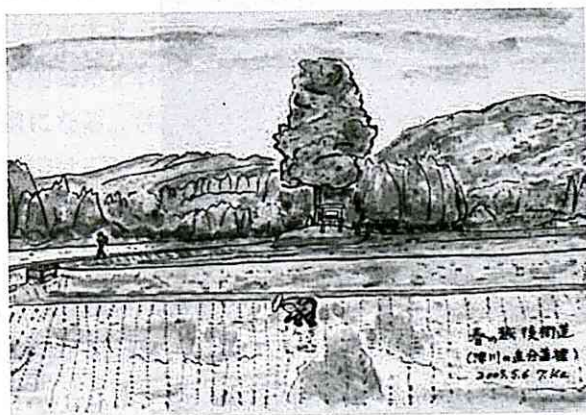


図-3 会津街道（越後街道）の道標がある丘のスケッチ（中央の杉木立）



写真-1 角島の追分け道標

道標は凝灰岩の四角柱で高さ60cm、径19cmである。軟らかい石に刻まれているため文字はやや風化し、読みにくいのが、案内版にあるように、右という文字と左の文字は明瞭に読みとることが出来る。（右の写真）

図-3は角島集落西詰めで磐越西線のガードをくぐると目に入る光景である。

平成17年7月13日梅雨明けの暑い日に我々4人はここを出発点として諏訪峠に向かった。スケッチの丘陵左方向が諏訪峠である。4輪駆動の軽自動車を持っていたので、行けるところまで進むつもりで道標を信じ、杉木立の左脇を進んだが、林道にはいつてしまった。どうやら街道はこの道ではないようで、やむなく磐越西線のガード手前まで引き返して清川温泉へ行く道から諏訪峠の登り口を見つけることにした。

3) 諏訪峠への道

清川温泉の建物は丘陵中腹にある。かつて三河から津川まで歩いた時、帰りに汗を流した所である。温泉は無色透明で泉質などの能書きは忘れたが、凝灰岩地帯を掘削した温泉であるため、肌がベントナイト特有のツルツル状態になる。この建物の下に諏訪峠への登り口があった(写真-2)。

登り口には津川町教育委員会が立てた道標と説明版がある。道標には「旧会津街道」と書かれている。会津の気多宮の道標には越後街道と書かれていた。新潟から会津に向かう時は会津街道であり、福島から新潟へ向かうときは越後街道と言うように行き先で(地域で)街道の呼び方が変わる。説明版には「史跡若松街道」とも書かれている。さらに、一里塚が残されていること、津川町角島から三川村行地に至る7kmの諏訪峠越えの山道であること、往時は参勤交代や人馬往来で賑わっていたこと、地元では「殿様街道」といわれていることなどが書かれている。



写真-2 諏訪峠越えの越後街道登り口

この諏訪峠越えの道は難所である。修復された石畳が残されている。石畳は一抱えもある石で階段状に組まれた所もある。急坂なため人が歩くには階段が安全である。



図-4 越後街道絵図(津川～柳新田～諏訪峠～行地～新谷～綱木)

図-4に江戸末期に描かれた街道絵図を示す。絵図には諏訪峠の前後に柳新田と行地いくちの一里塚（黒丸）が描かれている。諏訪峠には「すハ峠冬雪中ハ大なん所の山也」とある。

現在諏訪峠の頂部には電力会社の中継基地があり、峠までは管理道路として拡幅・舗装された道が出来ている。石畳の道は全長4kmあるが、この新道で5ヶ所に分断された。分断された街道にはそれぞれに番号と保存距離が記された標注が建っていて新道に出たり入ったりしても歩く者が迷うことはない。やがて旧道は柳新田集落に達する。ここから先は峠を越えて行地まで集落はない。

旧街道は柳新田の民家の庭先で消滅する。この柳新田には「柳新田の桂」という樹齢300年の津川町指定文化財の巨木がある。下見に来たとき集落の畑の中に標注があって、それには「是より700m」とあったので集落を左（北）に折れて一人で細道を登って行った。てっきり旧街道と思っていたのだが、道は険しく、雨による侵食で道は段差が出来、V字に掘れて歩きにくい。30分ほどして桂にたどり着いた。緩い斜面の上に二股に分かれた巨木があった。樹高は30m余り、目通りの太さは3mを越えている。周辺から湧水があり湿地化している。桂の生育に合った環境とのことである。

山道はここで途切れる。この道も「会津街道筋」とされるが現在は灌木で行く先を阻まれ、桂の大木から先へ進むことが出来ない。昔は諏訪峠への近道であったようである。隊員に桂の大木まで行くか否か問いかけたが、暑さで少しばてているせいか返事が無かった。

車で舗装路に行くことにした。柳新田から500m程進むと左に折れる道がある。直進すると林道になる。注意しないと直進して林道に行くことになる。下見の時、直進してしまった。林道は石ころだらけの山の中腹をうねうねと続き、それでもなんとか行地の集落に到達した。あとで気がついたのだが新車のオイルパンが割れていた。7万円を山道に捨ててきた事になった。現在、この林道は土砂崩壊のため通行出来ない。

我々の軽四駆は林道との分岐点を左に入りあえぎながら諏訪峠の頂きをめざして登った。途中に一里塚があった。



写真-2 諏訪峠越えの越後街道登り口

一里塚は一對残されている。写真-3は街道の上方からみたところで、二つのこぶの中央が旧街道である。右の白地は電力会社の管理道路、車は塚の後ろを回って登ってきた。現在一里塚は新潟県では八つしか確認されていない。この一里塚は形が良く残っている。寛文七年（1667）に会津藩では領内に一里塚を築いたのでそのころのものといわれている。

舗装はとぎれとぎれになるが、10分程で峠の頂部に到達する。昔の茶屋跡が今は休憩小屋になっている。先の大風で杉の大木が倒れ、休憩小屋を直撃した。杉の木は取り除いたが屋根が破損している。危険なので中に入らず、飯豊山系の見える東側で昼食を摂った。峠の頂部は車が自由に駐車できる程の広場になっている。



写真-4 峠頂部で弁当を食す

仕事の関係で野山に良く出るが昼食も最近はコンビニ弁当か食堂に入ることが多い。今日は天気も良く久し振りに持参の弁当を野外で食した。

4) 峠の吉田松陰

諏訪峠の頂きに吉田松陰の詩碑が建っていた。詩文は漢詩で次のように記されている。



写真-5 吉田松陰の詩碑

吾遊北越正雲時
 八田福鳥諏訪峰
 八田福鳥吾不懼
 獨難諏訪高峻雲
 偃俛而登腰欲折
 有時驚風掠空起
 有時日脚射雲罅
 幸苦乃極最高處
 奧野越山連天白
 雪深鐵丈不可測

吉田松陰は友人を訪ねて東北の旅に出た。嘉永4年（1852）2月21歳であった。この旅には松蔭より10歳年上の同伴者がいた。肥後藩士宮部ていぞうていぞう鼎蔵である。この人は後に新撰組の近藤 勇と白刃を交えた

人物である。彼らは江戸から出発して水戸を通り、会津、新潟、相川、そして日本海側を北上して弘前、竜飛岬でUターンして盛岡、仙台、会津から日光街道を通って江戸まで140日、1日10里（約40km）を歩いた。道端で小用を足したあと、そのロスを取り戻すため駆け足をしたという。当時、藩外へ出るときは藩の許可が必要であった。しかし、無断で旅に出たため帰ってから罰せられている。

松蔭は文筆に秀でていた。この旅で「東北遊日記」を書いている。後に勃発した戊辰戦争で、薩長軍の参謀である山縣有朋は会津を攻めるとき、「東北遊日記」を熟読してから海路新潟の太夫浜へ上陸し、新発田そして諏訪峠を越えて越後街道を通り会津に達している。

松蔭は本誌（その3）で述べたように、焼け山の宿で一泊してから諏訪峠を越えた。津川までイザベラ・バードと同じ道をたどっている。しかし、バードは夏に阿賀野川を船で下って新潟へ出たが、松蔭は真冬に歩いてこの峠を越えたのである。

週間朝日06・3・24日号 司馬遼太郎「松蔭のこころ」に次のような事が書かれていた。

【会津から新潟に抜ける道では諏訪峠が一番難所でした。会津藩士も無理だと止めたぐらいです。夏ならハイキングコース程度の峠ですが冬に越える人は今でもいない、2人とも遭難してもなんの不思議ありませんでした】（会津若松市在住滝沢洋之さん談）

詩碑にはこの時詠んだものが刻まれている。漢詩はよくは判らないが、概ね次のように解釈した。

「私は雪の積もる北越に来たが、今まで通って来た八田や福島（福取）の峰は懼れるに足りない。しかし、諏訪の峰は腰が折れるのではないかと思うほどである。時に強風が吹き、時に雲間を突き破って日の光が射し込み、やっと辛苦して高所を極めた。越後の山々は天に連なるかと思うほど白雪に覆われている。その雪の深さは幾丈あるか測りしれない。……」

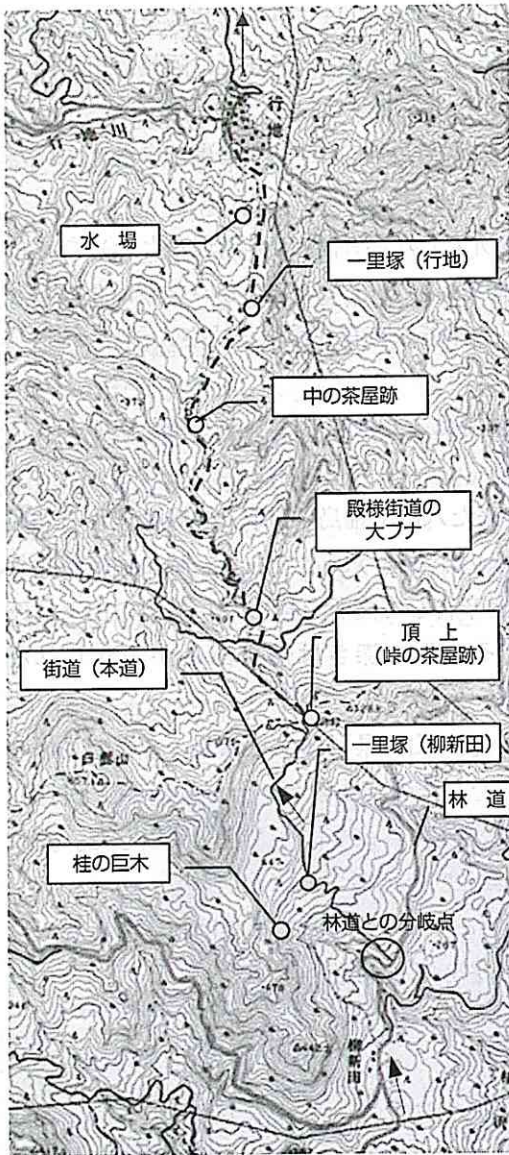
松蔭は松蔭吉田寅次郎といい天保元年（1830）萩（山口県）に生まれた。8歳で長州の藩校「明倫館」の教授見習いになった。御前講義をしたのが9歳という。後に「松下村塾」を創り門下生に伊藤博文、高杉晋作、山縣有朋など後の時代を担う人物を輩出した。安政6年（1859）「安政の大獄」⁸⁾に連座して刑死した。29歳の命であった。

峠の峰でしばし松蔭に思いをはせた。我々も「辛苦乃極最高處」しなければならぬのに車で登ってしまった。あとでバチが当たるかも知れない。

5) 諏訪峠を下る。

車を峠に置いて街道を行地宿に向かって下りることにした。1/25,000の地形図に諏訪峠の街道は描かれていない。鳶田隊員がルートを地図（図-4）に書き込んでくれることになった。頂部の西側に会津街道の標注（写真-6）があり、ここを下りるのである。巾一間あるかないかの狭い道だが、勾配は登りほどきつくない。小さな峰を越えると石畳の道があった。標高520mから490m付近を登り降りしながら歩く。風があつて快適であるが標高がこれより下がると雑木林や杉林に入る。するとブヨが顔をめがけてしつこくつきまとうようになった。タオルや木の枝葉でブヨを追い払う。

15分程歩くとブナの大木が2本あった（写真-8）。ここの説明版によれば、寛永12年（1635）参勤交代が法制化され、当時の新発田藩や村上藩の藩主がこの道を利用したので「殿様街道の大ブナ」と命名した。樹齢は300年、幹周348と411cm、樹高はそれぞれ27mとある。文化11年（1814）に十辺舎一九が、嘉永5年（1852）に吉田松蔭がこの道を通ったとも記されている。



図一五 諏訪峠から行地への道 (点線)
(1/25,000×70%)

越後街道が会津藩により整備されたのは、今から359年前の慶安2年(1649)頃である。参勤交代の制定は1635年、樹齢が300年であればこのブナは元禄時代(1688~1703)に芽生えたことになり、参勤交代が法制化してから50年ほど後の勘定になる。樹齢をどのように調べるのか判らないが、細かいことを抜きにすれば、街道の整備も参勤交代もブナの木も誕生は同じ頃ということになる。我々はこのブナの木を「元禄ブナ」と名付けることにした。このブナの木の手前に雪の圧力?で谷側に傾いた木製ベンチが2つある。ここに座ると北東に飯豊山系が一望できる。地すべりもなく地形は安定しているようである。一服してから細い道を下った。



写真一六 諏訪峠山頂の標注と下り口
(左から鈴木、山田、栢森隊員)



写真一七 道の状況と植木の観察



写真一八 殿様街道の「元禄ブナ」
(三川村)

雨水や雪解け水でV字型に穿たれた道を20分程行くと「中の茶屋跡」にでる。ここにも説明版があった。「中部北陸自然歩道 中の茶屋」(環境庁・新潟県)とある。津川町と三川村を結ぶこの諏訪峠は自然歩道になっている。後日訪れる人のため参考までに説明版の文言を記しておく。

『諏訪峠の7合目にあたるこの場所はふもとの人が「中の茶屋」を開き商売を行っていたと言われていました。「中の茶屋」は諏訪峠頂上の「峰の茶屋」と違い、冬になると里へ降り年中商売をしていなかったと言われていました。

平成8年に新潟県と三川村で実施した「殿様街道」の調査では、残念なことに「中の茶屋」の形跡等は発見されませんでした。しかし、このことから、茶屋では、ふもとで作った団子や簡単なものを販売し、ちょっと一服する簡易な施設であったことが考えられます。』と記されている。



写真-9 雨裂の道を下る



写真-10 中の茶屋跡(右)

簡易な施設とはどのようなものか明かではないが竹や木で作った・・・よしず張りのようなものであったと想像される。東松峠の茶屋跡には粗末だが石の基礎が残っていた。この茶屋跡には痕跡となるものは残されていない。現在は杉林になっているが、街道の脇に人為的に整地をしたと見られるそれらしきスペースがあった(写真-10)。

嘉永4年(1851)越後高田藩士が新発田から諏訪峠を越える時の道中日記⁽⁴⁾がある。

「行地 廿七丁 人馬継、是より諏訪峠に掛かる、余も歩行、壺里上りて茶屋有、爰にて休足す、笹餅などありて給ぬ、下り壺里余山を下りて五七丁はあがの川なり、」

中の茶屋跡を後にして行地宿に向かって歩く。道は徐々に勾配が緩くなり歩きやすくなる。おおよそ17～8分で諏訪峠第2の一里塚が現れる(写真-11)。

関ヶ原の合戦(1600)以降、東海道を始め、全国各地の主だった街道の整備が進められた。先に述べたが、会津街道(越後街道)は慶安2年(1649)頃会津藩により整備された。当時は、阿賀野川の水運とともに塩、物資や日本海沿岸の文化等を会津へ導入した重要な街道であった。



写真-11 諏訪峠一里塚（行地）中央が街道

一里塚の説明版には『徳川家康は、慶長9年（1604）各地の街道の両側に、旅人の安息と便利を与えるために一里塚を築造させました。会津藩でも幕府から一里塚を造るよう命を受け、寛文7年（1667）会津街道に一里ごとに塚を造らせ「えのき」を植えさせました』とある。本誌その2「東松峠」編で一里塚を作ったのは織田信長である、と記した。「ええき木を植えよ」



写真-12 簡易水道の水場

が「榎木」になったのは一緒だが、塚の築造主は歴史学者の間でも「織田だ、いや徳川だ」とまとまりがない。我々は素直に立て看板に従うことにした。

現在、東蒲原郡内にある一里塚は、福取・柳新田・行地、それと一里石のある栄山を含めて4ヶ所である。我々は西会津の東松峠にある一里塚を含めてのこれらの貴重な史跡を全て見る事ができた。しかし、「えのき」が立つ塚には未だお目にかかれていない。

一里塚を過ぎて15分ほど行くと周囲が開け、正面に一本のコブシの木と草に覆われた棚田（休耕地）が現れる。集落が近いことがわかる。先ほどから左手で水音がする。街道をそれて休耕地から脇に入ると簡易な貯留槽があった。集落の水源と思われるが山からパイプで水を引いてコンクリートの円筒に貯めている。水量が多く苔むした槽から溢れていた。こぼれ出る水で顔の汗をぬぐい、喉を潤した。山の水は冷たく気分爽快である。最近山歩きをしても水筒は持たない。茶などが入ったペットボトルである。これをリュックのサイドネットに刺して歩くと枝などに引っかかって落とすことがある。暑い時の山歩きは水分を採らないと体が参ってしまう。水無しではメンバーに迷惑がかかる。山歩きのルートでどこに水場が在るかあらかじめ分かれば助かる。念のため図-5に水場を示した。

ここから行地の集落はすぐである。道は幅2～3mの砂利道になり農耕車が走れる程度に広がった。やがて集落の屋根が見えた。行地に到着である。



写真-13 行地側の街道登り口



写真-14 行地宿

行地は諏訪峠越えの要衝であったが、現在は宿場の面影を残すものの戸数20前後と静かな過疎の集落となった。集落の途中に越後街道の道標や説明版があった。

行地から先は舗装された山道になる。道の両側は杉林である。行地集落には前もって車を止めて置いたので時間節約のため車でつな網き木宿に向かうことにした。

山道を5分ほど走るとあらや新谷川に出る。新谷川の左岸は県道新発田-津川線が通る。

新谷川を遡って新発田方向にしばらく行くと新谷川の右岸に網木川が合流する。この先に新谷の集落がある。新谷の橋を渡って対岸に出ると、今度は網木川の左岸沿いに県道があり、3kmほど行くと網木集落に入る。網木は網木川に沿って下流から順に下網木、網木、上網木の3集落に分かれている。行地から行くと初めに下網木に入る。入ると言っても下網木集落は頑丈な護岸が施された網木川の両岸に立ち並んでいる。左岸側の県道が旧会津街道（越後街道）である。下網木の集落に花崗岩で出来た石柱が家の角々に立っているのが目に留まった。車を止めてみると何左右衛門とか何兵衛とかなにやら屋号が刻んである。写真-15にしめした石柱は「大和屋清九郎」とある。この家は下網木の区長さんのお宅であった。当日は先



写真-15 網木集落の石柱

を急いだのでそのまま新発田に向かったが、後日区長さんをお訪ねして石柱の謂われを伺うことが出来た。それによれば、「昭和48年8月に起こった集中豪雨（8・18水害）で、下網木をはじめとして網木川沿いの家々は濁流に流されたり土石流で破壊されたりした。この若い人たちは新潟や新発田に勤め先があり、災害後下網木に帰ったが、家が無くなっており何処が自分の家か判らない始末だった。そこで、網木集落では部落集会を開き討論した結果、再びこのような災害が起こり、自分たちが犠牲になれば子供達は何処が自分の

家が判らなくなるであろう。それでは子供達がかわいそうである。せめて自分達が育った場所が判るように屋号を刻んだ石柱を家の角に建てて濁流で家が流されても場所が判るようにしようと決議し、石柱を建てた』というようなことを話された。



写真-16 旧会津街道の石柱

上流の網木集落は右岸が水田で、戸数が少なく網木川が氾濫しても水田が遊水池の役目を果たす。このため床下浸水かせいぜい床上浸水で済む場合もある。下網木は谷間の集落である。このため川が増水すると激流になり河岸の家は流失するであろう。地形から見て、網木よりも下流の下網木の方が被害は甚大であったと想像される。現地を見ても網木集落は護岸が小規模である。

これに対して下流の下網木集落のそれは堅固に造られている。下網木の集落に建てられた石柱の数は聞き忘れたが、その建造費用は当時の金で2,000万円を要したという。ついでと云っては失礼だが、旧街道の石柱まで立てられている。

上流の網木集落の中程、網木川左岸に網木小中学校の統合校舎がある。近年子供が少なく廃校の

張り紙があった。その正面、県道を挟んだ川側に羽越災害の石碑が建っている。石碑の裏に次のような文言が刻まれている。

『和48年8月28日夜半来の集中豪雨は翌29日未明400ミリを超える雨量となり網木川は山腹崩壊による土石流が鉄砲水となって部落を襲った。山崩れによる倒壊家屋3戸、全壊流出7戸、半壊11戸、床上浸水42戸を数え、耕地のほとんどは冠水し、流出、埋没30町歩に達し、道路の決壊、橋梁の流出により交通通信は全く途絶える大災害となった。村を上げて復旧に当たること4カ年余りの歳月を費やし、道路、河川、農地、農業施設の災害復旧工事がされたことを記念し、部落民一同の浄財により昭和46年8月この碑を建立した。』



写真-16 旧会津街道の石柱

羽越水害は昭和48年（1967）8月28日～29日にかけて秋雨前線が日本海側を北上して、新潟県北部から山形県南部にかけて集中豪雨をもたらした。新潟県の胎内川、関川、荒川、加治川、安田町の

ツベク
 都辺田川そして山形県の最上川などで大小河川が氾濫するとともに、土石流が発生。関川村、三川村、黒川村、中条町、神林村などで死者42名、不明88名、家屋の全壊、半壊、流失は計793戸（8月31日の新聞発表）。総雨量の最大値は胎内川上流地域で748mm、村上土木事務所の観測で24時間雨量344.5mm、同じく新発田土木269.3mm、新津土木280.5mmである。いずれも前年の7.17水害の雨量の2倍を上回った。

特に短時間に集中しことが大災害となった。災害から4日たった9月2日、西村建設大臣を初めとして閣僚が視察。地元では対策本部も設置しない手ぬるい政府の対応に抗議、これに対して建設大臣は『29日の閣議段階で死者7人、不明1人ということで対策本部を設置しなかった。』と発言。電話・道路・鉄道が不通で人が現地に入らず、正確な情報が集まらないことが政府の対応を遅らせた。ちなみに当時の首相は佐藤栄作である。現地にやってきたのは西村建設大臣のほか田中角栄、稲葉修、県では君副知事などである。災害は地震でも水害でも初期報道では被害は小規模である。そして時間が立つに伴って増大する。対策対応は被害状況を確認してからでは遅い。震度や降水量から判断を早める必要がある。先のインドネシアジャワ島の地震でも、初めにアメリカ地質調査所が震源と震度と被害を発表した。その時、被害は死亡者4人程度と報じていた。ラジオをきいてい



図-6 網木集落 1 : 25,000
 (東赤谷 (50%))



写真-18 下網木集落と網木川
 (下流より、右の県道が旧街道)

たのだが火山地帯の地震である。被害はかなり大きいと素人ながら直感した。

新潟県は昭和年代、39年6.16新潟地震、41年7.17水害、42年8.28羽越水害と自然災害が続いた。羽越



写真-19 網木集落の網木川
 (下流を望む)

災害から来年で40年になる。

図-7は網木から丑ヶ窪までの絵図である。

網木を出ると網木川にかかる幾つもの橋を渡る。現在は網木川の左岸を県道がとおる。一里塚があり峠に（ふな峠此の間人家無し）とある。今「ふな峠」は地図にない。赤谷宿では（奥州会津入り口之御番所あり 入り切手とるべし 女切手改）とある。赤谷（現上赤谷）の新発田寄りに さかい川 がありここに会津領と新発田領の境がある。中央に越後蒲原郡、両脇に（東会津領分・西・・芝田領分）と記されている。この界は現在北蒲原郡と新発田市の境界である。赤谷から3km程で中山（現中々山）にでる。ここに角石原古戦場跡という石碑があった。

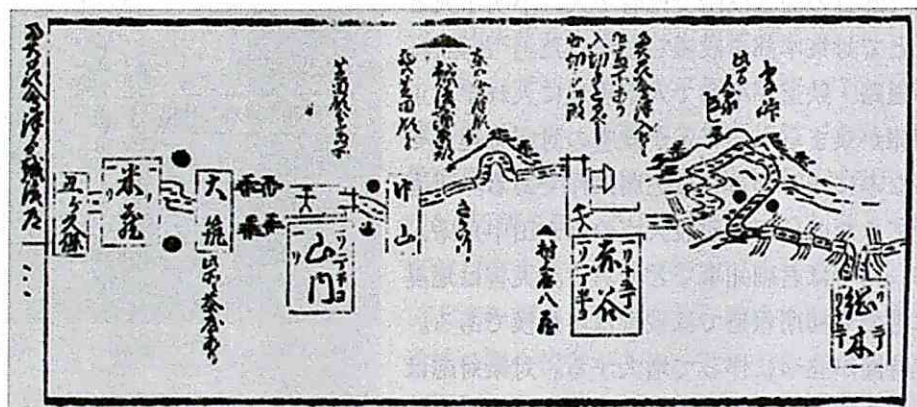


図-7 街道絵図（網木～丑ヶ久保）

この石碑の位置は現中々山集落の県道脇で小さな隧道の手前である。ここは右手（東）に加治川があり県道との間にはかつてJR赤谷線があった。現在は廃線となり自転車道が敷かれている。角石原の古戦場は慶応4年（1868）の新政府軍（薩摩・長州連合）と会津軍（奥羽越列藩同盟）による北越戊辰戦争の跡である。この戦争では新発田藩は早々と列藩同盟を離脱した。このため政府軍は新発田領内の太夫浜に上陸してこの街道を会津へ向けて進軍する。郡境で両軍は激戦となったが、多勢に無勢、同盟軍は中山と赤谷の民家を焼いて敗退した。長岡藩を初めとする列藩同盟軍にとっては新発田藩の戦線離脱は裏切り行為に思えたであろう。その後新政府軍は越後街道を進み会津に達したのである。



写真-20 角石原古戦場跡の碑

聞くとところによれば、飯盛山で薩長軍は自決した17歳前後の少年兵（白虎隊）の股間を切り取って行ったという。面白半分で行った行為かも知れないが後世に怨恨を残すことに

なった。歴史は所により時代によって評価が変わる。明治になって軍事力が増強され日清戦争、日露戦争、さらに太平洋戦争へと突き進んだ。その原点が「戊辰の役」に有ったと思えてならない。

加治川に沿って街道は平野に出る。あと12～3 kmで新発田市街に入る。新発田市には会津の若松城と同じように新発田城がある。しかし、残念ながら会津にある歴史資料館のような施設はない。

我々の「越後街道探索」もここで終わることにした。2003年5月から始めて今年で足かけ4年になる。暇を見つけてすこしずつ探索を繰り返した。なにか得るものがあったかと聞かれれば返答に困るが、街道には歴史が詰まっている。自分たちの住んでいる周辺にもまだ知らないことが沢山有ることを知った。



図一 8 街道絵図(天王原～五十公野)以降は米沢街道

探索で一つ困ったのは地図の地名と現地の地名が異なる所があることである。「平成の合併」以降、地名がどんどん失われ改変されている。例えば「谷地・栗原・芦原」などの地名は溪流沿いの開墾地の意味があり、元の地形を表している。水害と闘い、そこで生活した人々の労苦があった。それが江南とか中央とか覚え易さはあっても意味を持たない、色が良くても味の無いトマトのような無味な地名に変わった。地名を大衆に迎合して安易に改変するのではなく、歴史を踏まえて吟味し、後生のためにも謂われのある地名は地図に残さなければならぬ。「越後街道探索」では、ささやかな抵抗の意味を込めて旧地名のまま表記させていただいた。

(おわり)

注釈

- 1) 三島通庸：天保6年（1835）薩摩藩士三島通純の長男として生まれる。明治7年（1874）酒田県令となる。明治15年（1882）福島県令となる。会津三方道路の建設を強行する。これが元で多くの対立（自由民権運動）や事件（福島事件、喜多方事件、加波山事件）を生む。明治16年（1883）栃木県令（福島県令兼任）となる。明治17年（1884）内務省土木局長。明治18年（1885）警視総監となる。後ろ盾として伊藤博文がいた。明治21年（1888）54歳で没。
- 2) 会津六郡：南会津、北会津、大沼、河沼、耶麻、東蒲原の6郡を指す。
- 3) 河野広中：嘉永2年（1841）陸奥国三春藩士河野広可の三男として生まれる。自由民権運動の代表的指導者で、戊辰戦争で新政府軍に協力し板垣退助を知る。明治7年（1874）～明治11年（1878）石川に住み区長を勤める。石川区長から県六等属となる。明治15年（1882）福島県会議長。この时会津三方道路工事に反対。県令三島通庸と衝突し「福島事件」となり、軽禁獄7年の刑を受けた。恩赦で出獄、第1回衆議員選挙に当選してから連続14回当選。創立以来自由党幹部として活躍し、第19議会には衆議院議長、大正3年大隈内閣の農商務大臣となり、後に憲政会の幹部として活躍、衆議院議員在職中に死去した。
- 4) 自由民権運動：今から約120年前、明治新政府によって権利行使が極端に制限された時代に、憲法を立て国会を開いて民衆の政治参加の権利などを保障することを望んだ全国的な政治・思想運動。諸階層（不平士族、開明派士族層、弁護士・ジャーナリスト・教員などの知識人、豪農商層など）がそれぞれの要求を提示・結合させながら発展させた。経済・社会・文化運動的な性格も持ち、長期にわたって広範囲な運動になった。
- 5) 福島事件：（明治15年11月28日～12月1日）河野広中を中心とする福島自由党員と藩閥政府直系の県令三島通庸が正面から衝突、自由党員と農民が大弾圧を受けた事件。三島通庸は、自由党を弾圧すると共に、不況下の農民に労役を課して三方道路を建設しようとした。工事中止の訴訟は却下され、指導・支援者の投獄・暴行も露呈した。激昂した農民千数百名は逮捕者の釈放を求めて蜂起、警官隊と衝突した。河野広中らは政府転覆の陰謀があったとして、連座入獄させられた。これが加波山事件を誘発したと言われている。
- 6) 喜多方事件：（福島事件に共通）福島県令三島通庸の民意を無視した三方道路の工事に反対して、耶麻郡の農民千人余が「彈正ヶ原」に集結して、喜多方警察署に押し掛け衝突した。その首謀者として自由民権活動家の徹底的な取締りを行ない河野広中らを捕らえて刑に処した。
- 7) 本尊岩：津川と揚川の中間、阿賀野川右岸の岸壁に屹立する岩塊、その形が仏に似ていることから本尊岩と呼ばれた。その景観は阿賀野川と対になり美しく尊厳があって通行する人々を慰めた。しかし時に落石があり、この岩の下をJR磐越西線と

国道49号が通るためその都度JRや国道が通行止めとなった。北海道のトンネル落盤事故を契機に平成8年に調査点検が行われて取り除かれることになり、現在その姿はない。

- 8) 安政の大獄:安政5年(1858)、井伊直弼が尊攘派に対しておこなった弾圧事件。京都では大勢の逮捕者が出た。

井伊直弼は文化12年(1815)～万延1年(1860)江戸末期の近江彦根藩主。大老。直中の14男として生まれる。兄の死により嘉永3年(1850)36歳で家督を継ぎ、藩政改革につとめる。安政5年大老となり勅許を待たず安政の5か国条約に調印。13代将軍徳川家定の後継者を紀州の徳川慶福(のちの家茂)とし慶喜を推し、直弼の外交政策に反対する一橋派を安政の大獄で処罰。万延1年江戸城桜田門外で水戸・薩摩の浪士に暗殺された。

- 9) 北越戊辰戦争:慶應4年(1868)5月2日小千谷の慈願寺で新政府軍の東山道軍監岩村清一郎と長岡藩軍事総監河合継之助が会談、河合継之助は新政府軍に反意の無いことを説明するが岩村は受け入れず会談は決裂した。このため長岡藩は徹底抗戦を決意し、かねてから会津・米沢から強く参加を要請されていた奥羽越列藩同盟に参加し、5月6日には村上・村松・四日市・黒川各藩が同盟に加わった。5月16日には新発田藩もこれに加わり、新政府軍と奥羽越列藩同盟軍は長岡を初めとして各地で激戦となった。しかし、新発田藩は列藩同盟を離脱、政府軍は新発田藩の協力を得て新発田藩領の太夫浜に上陸し新潟町、中越方面、長岡など次々と新政府軍の手に落ちた。8月11日最後に村上藩が降伏、9月22日会津藩は降伏して約3ヶ月にわたる北越戊辰戦争は終了した。

主な参考資料

- (1) 「津川町の歴史と文化財」 津川町教育委員会 平成16年4月1日発行
- (2) 有菌庄一郎、遠藤匡俊、小野寺淳、古田悦造、溝口常俊、吉田敏弘 編
「歴史地理調査ハンドブック」 古今書院 2005年5月10日発行
- (3) 「土石流」- 8・28水害記録- 新潟県北蒲原郡安田町 昭和43年3月31日発行
- (4) 「西会津町史」 第7巻 宗教・文化資料 西会津町史刊行委員会 平成12年3月31日発行
- (5) 「新潟県地名大辞典」 角川書店 1989年8月発行
- (6) 読売新聞福島支局「戊辰戦争は今」歴史春秋出版(株)2001年10月発行
- (7) 安藤秀雄編「河合継之助のすべて」新人物往来社平成9年11月発行
- (8) 島 遼伍著「北関東会津戊辰戦争」(有)随想舎2004年6月発行
- (9) 注釈に用いた三島通庸・河野広中に関する事件等はインターネットによる検索・資料を用いた。